

2022 年度 一般入試
第 2 回

国 語

〔注意事項〕

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにして下さい。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないで下さい。
- 6 考査中はよそ見をせず、きちんとした態度で行って下さい。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげて下さい。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないで下さい。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日、両親のけんかにしたたまれなくなって家を飛び出してしまった真子は、画家の夏鈴さんとその父親（ジジさん）と知り合う。イカル荘という夏鈴さんの家には、インドネシアからの留学生のデフィンがいた。

急にチャイムの音がした。

「あら、だれかしら？」

夏鈴さんが不思議そうにドアに近づいていった。

ドアの外から「藤念です」と声がした。

すぐにパパだと真子にはわかった。くつろぎかけていた体と心が一瞬でかたまり、真子は表情を引きつらせた。心の中が大きくざわめいた。

「あら、どうぞ」

夏鈴さんが真子の顔を見ながら、黄色いドアを開いた。

この暑さの中、A ネクタイをしめたパパの姿があった。にこやかな笑顔を浮かべているけれど、それは作り笑い。心の中はいつものパパに違いない。クセのある髪の毛をきれいになでつけ、黒縁のメガネの奥にある細い目を真子に向けていた。

居間に入りながら、しきりに頭をさげている。

「申し訳ありません。すっかりご迷惑をおかけしてしまっただようで……。何も言わずに急に飛びだして行って、なかなか帰ってこないの心配していたのです。小さいころから妙に向こう見ずなところがありまして……。ご連絡いただき、本当にありがとうございます。お礼はまた改めまして。おい、真子、帰るぞ。これ以上心配かけるな」

真子はそばにあった大黒柱に片腕をそっと回した。次第に力が入っていく。もう片方の腕を柱に回す。両腕に力が入っていく。そして折れてしまいそうなほど強く大黒柱をだきしめた。

「イヤだ、帰らない」

声が震えている。

「な、なにをわがまま言っているんだ。申し訳ありません。甘やかして育ててしまったものですから……。真子、こちらさんのご迷惑も考えろ。全く、おまえは」
パパの声がいらだっている。

「イヤだ」

自分の声が遠くに聞こえた。

真子の声を聞いて、パパの表情が急変した。見慣れたパパの顔になっていく。顔が赤らみ、鼻の孔がふくらみ、額の深い一本のしわを包むように筋肉が盛りあがっていく。絵本にでてくる鬼の形相だ。

そして、スローモーションのように、パパの腕があがっていく。それと同時に立ちあがったジジさんが、パパの腕を押さえた。その瞬間、パパの表情がピタッと止まった。そして、するすると鬼の形相がほどけていった。

(え?)

パパはジジさんの顔を見つめている。そのパパの表情を真子は見つめた。

次の瞬間、真子の視線をさえぎるように、夏鈴さんが B 体をはさんできた。真子の視界からパパが消えた。

「まあまあ、落ち着いて。全く、お互い、娘には I を焼きますな。どうです。近くに、ビアガーデン、っていっても、木々に囲まれた原っぱにテーブルがでてるだけですが、うまい自家製のビールを飲ませてくれるところがあるんですよ。ちょっと一杯、行きませんか? 藤念さん、飲めるんですよ? え、車で来てるって? それは残念だなあ」

①ジジさんの声が不自然に高い。

「でも、そこ、つまみもうまいんですよ。地元野菜にこだわった料理だね。藤念さん、腹、減ってるでしょ? 腹が減っては II もできんってね、わははは」
とってつけたようなジジさんの笑い声が部屋の中に響いた。

「え、いや、あの、でも」

面食らっているパパの音がする。

(パパが途中で起こるのをやめた?)

真子は驚きのあまり、大黒柱に顔をぶつけた。

(そんなこと、今まで一度もなかった)

パパの怒りを止めることはできない、止められる人なんていないと、真子は思っていた。それなのに今、明らかに、パパから怒りの表情が消えていった。

ジジさんは、なんだかんだと話しかけながら、パパを引きずるようにして居間からでていこうとしている。真子の目に、パパの後ろ姿がちらりと見えた。そして、黄色いドアが音をたてて閉まった。

(中略)

ふうっと大きな息をついて、夏鈴さんが真子のほうへとふり返った。

② 真子はまだ大黒柱にしがみついていた。その柱に心も体もすがりつき、このまま一本の柱になってしまいたかった。

「もう、その柱を離しても大丈夫よ」

真子の顔を見る夏鈴さんの表情に笑顔はなかった。少し青ざめているように見える。そして言葉を選びながら口を開いた。

「ねえ、真子ちゃん、今夜、ここに泊まらない？」

カチコチに力の入ってしまった指を一本ずつ柱から離しながら、真子は夏鈴さんの顔を見た。

「え？」

「それいいですね。楽しいです」

デフィンがこれでもかというほど、白い歯をだして笑っている。

「あの、あの、いいんですか？」と、真子はつぶやくようにたずねた。

「かなりびっくりしたけれど、真子ちゃんのパパさん、少し頭を冷やす時間が必要じゃないかなって思ったの。何があったかわからないけれど、真子ちゃんがお家に帰っても、こじれるばかりのような気がするの。ま、今夜のところは、ジジに任せておけば大丈夫だと思うわ」

夏鈴さんがドアのほうを見ながら言った。

「わたしが言うのもなんだけど、ジジって、結構おせっかい焼きだったのね。知らなかったわ」と、えくぼを浮かべた。

「すみません」

真子は力なく頭をさげた。

「え、どうしてあやまるの？ 真子ちゃん、何かものすごく悪いことでもしたの？ そうじゃないでしょ。それなら、あやまることなんてないのよ。全然、ない。ってどうか、あやまっちゃダメよ」

強く言いきった夏鈴さんが真子のほうに向きなおった。

「真子ちゃんは悪くないと思う。それにね、わたしは、何度も言うけれど、超がつくほどのおせっかい焼きなんだから。ジジなんかには負けなくらいね。だから、真子ちゃんを泊めるなんて朝飯前よ」

夏鈴さんがやっと笑顔になった。

(ここにいてもいいの?)

③ 真子の心の声が聞こえたかのように、夏鈴さんがうなずいた。
体からすっと力が抜け、真子は音をたててイスに座りこんだ。

いつもなら、おこった。パパがいる部屋で、憤りと不満と少しの悲しさをかかえ、息をつめ、石のように座りこんでいるしかなかった真子。時は進まなかった。その先に何かがあることなど、想像さえできなかった。

(わたし、わたし、ここにいられる)

大きく息をすった。

キッチンから、フライパンが音を立て、いいにおいが流れてきた。とたんに、お腹が鳴った。

(朝から何も食べてなかった)

お腹がすいている感覚さえなかった。

朝から、パパとママは食欲をなくすにはじゅうぶんすぎるほど険悪だった。

(もう、イヤだ)

朝から何度も同じことをつぶやいてきた。真子は頭をふるふるとふった。

「完成ですね。デフィンのナシゴレン、最高です」

自分の作った料理をほめているデフィンと、にこやかな夏鈴さんが食器を運んでくる。真子も手伝った。

(これが、ナシゴレン？ チャーハンみたい)

目玉焼きがのっているナシゴレンからはエスニックな香りがしていた。肉じゃがの盛られたお皿も隣に並び、飲み物、お皿にお箸やスプーンが用意された。

(中略)

夏鈴さんが真子を見ながら口を開いた。

「デフィンね、お国ではお嬢様なのよ。お料理も、お掃除もしたことがなかったのよ。お手伝いさんがいたんですって。だから、日本に来て、わたしが一つ一つ、教えてあげたのよ」

「はい、お手伝いさん、家に二人、ご飯作る人、お洗濯とお掃除する人、いますね。会いたい。小さいころには、乳母もいました」

口いっぱいナシゴレンをほおばりながら、真子は思わずデフィンの顔を見た。

「夏鈴さんの、おかげ。何でもできるようになります。これ、いいこと。一人で、どこでも生きていけます。真子ちゃんは日本の子。なんでも、できますね？」
真子はびっくりした。

「ご飯、ママが作れないから、いつもコンビニ弁当か、パンだった。わたし、作ったことなんてない」と、ナシゴレンを口に入れながら、ぼそぼそと言った。

夏鈴さんがふっと手を止めた。

「そうなの？」

勢いよく肉じゃがを取り皿に盛りながら、夏鈴さんが言う。

「別にコンビニ弁当でも、パンでもいいけど、たまには、真子ちゃんがママさんにご飯を作ってあげてもよかったんじゃないの？」

「え、ママに？」

「ご飯はママが作るもので、作ってあげるなんて、真子は考えたこともなかった。」

「そうよ。親でもなんでも、人がやってくれないからって、ふてくされて、ヒナ鳥みたいに口を C 開いて待っていないで、自分でやればいいのよ。それって自分のためになることよ。人のためにもなるしね」

夏鈴さんはふっとだまり、口元をゆるめてデフィンを見た。

「デフィンはお国に帰ったら、きっと、お料理しないでしょうね。でもね、デフィンのことだから、また海外に飛びだしていくと思う。そして、お料理^④しなくちゃいけないとなったとき、できるって、すごく強いことだと思わない？」

思わず真子はうなずいた。

「だいたい、デフィン、野菜を切るところから、できなかったものね」

夏鈴さんが苦笑いしている。

「何もできませんね。ぞうきんをしぼる、難しいですね」

（わたし、野菜、切れるし、ぞうきんもしぼれる）と思ったら少し気持ちが軽くなった。

お隣からもらったという肉じゃがのジャガイモが D 口の中で崩れていく。

（おいしい）

真子はナシゴレンをおかわりした。

にしぎきようこ『イカル荘へようこそ』より

問一 A 〽 D に適する語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あんぐりと イ ざわざわと ウ するっと エ さっぱりと オ きちんと カ ほろほろと キ せかせかと

問二 〽部 a 「しきりに」・ b 「向こう見ず」の意味をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------|-----------|-----------------|-----------------|
| a 「しきりに」 | ア れいぎ正しく | b 「向こう見ず」 | ア 後先を考えずに行動すること |
| | イ はずかしそうに | | イ 注意力が足りないこと |
| ウ 何度も | | ウ 相手の気持ちを考えないこと | |
| エ ゆっくりと | | エ 落ちこみやすいこと | |

問三 I ・ II に適する語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問四 部①「ジジさんの声が不自然に高い」について、この時のジジさんの説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がおいしいものを食べに行けるように、真子のパパを利用しようとしている。
- イ 怒りをあらわにした真子のパパを落着かせ、とりあえず真子から離そうとしている。
- ウ 空腹であると怒りが増してしまうので、真子のパパとにかく何かを食べさせようとしている。
- エ 娘たちの前で暴力的な姿を見せないように、真子のパパに頼もうとしている。

問五 部②「真子はまだ大黒柱にしがみついていた。その柱に心も体もすがりつき、このまま一本の柱になってしまいたかった」③「体からすっと力が抜け、

真子は音をたててイスに座りこんだ」について、この時の真子の気持ちについて、それぞれ説明しなさい。

問六 部④「お料理しなくちゃいけなくなったとき、できるって、すごく強いことだと思わない？」について、この時夏鈴さんが言おうとしていることとして最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分で家事ができるようになっておくと、お手伝いさんが困った時に手伝うことができるということ。
- イ 何事もやる気を持って取り組めば必ず身につけることができるので、努力することは大切だということ。
- ウ 家にお手伝いさんがいるようなお嬢様こそ、使用人の仕事内容をしっかりと理解しておくことが必要だということ。
- エ 自分で何でもできる強さを身につけておくと、周りに左右されず自由に生きていくことができるということ。

二 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『万葉集』をはじめとする古典を学んでいると、言葉というものが、どういう仕組みになっているか、気になります。日本語には「接頭語」というものがあります。語の上に冠して、意味を添える言葉のことです。「なか(中)」でも、ほんとうの「なか」なら、「まんなか」。さらにそれを強調すると「どまんなか」となります。ほんとうの「こころ」を「まごころ」といいます。「ま」も接頭語です。

建築家の佐川旭さんから、こんな話を聞いたことがあります。

上野先生、建築というものは、外から見える部分よりも、見えないところの方が多いですよ。だって、そうでしょ。床の下は見えないし、天井裏だって見えない。それに、ビルの場合は、地下に杭を打ってるんですよ。そういうところは見えませんよ。でも、見えないところで手を抜くと、家が傾いたり、雨漏りをして大変なことになります。

I は、誰でも良い仕事をするんですよ。見えないところが、大切です。それに、建築の失敗というものは、すべて見えないところから起るんですよ。

私は、なるほどと思いました。人が見えないところを大切にすることが「まごころ」だと思ったからです。

奈良大学のおトイレには、ただ一輪なのですが、ガラスの瓶に季節の花や草が活けられています。それは、掃除を担当してくれている方が、自分の判断でそうしてくれているのです。そこで、私は、どうして花を活けてくれているんですか、と聞いたことがあります。

A、その方は、不思議そうに私の方を見て、こう言いました。

ないよりも、あった方が良いと思います。

あまりにも、そっけない返事だったので、驚きました。すると、恥ずかしそうにこう言われました。

花を活けることも、掃除の一つだと思っんです。だって、そうすれば安らぎがありますから……。

B、掃除といっても、その場の汚れを取るだけではない。花を活けることは、その場をきれいにすることなのだとおっしゃっているのですね。自分の仕事は、この場をきれいにすることだ。だから、きれいにすればよいと考えるか、どうしたら、ここに来る人に安らぎを与えることができるのかと考えるか。考え方がまったく違うのです。

この話を聞いて、私は、自分の愚かさを恥じました。私は、節の最初に建築の先生の話を書いたのですが、見えないところに、まごころを込めることこそが大切だということ学びました。そして、今、人の省みないものに心を込めることで、人は安らぎを得るということを学びました。

人は、よく勉強しなさいと言いますが、勉強というものは、教室や勉強部屋ばかりでするものではありません。新聞を読んで、わからない言葉があったら、メモしてみる。C、辞書を引く。さらには友達や大人と話してみる。そのすべてが勉強です。もちろん、テストに出るところをしっかりと覚えて、点数を取ること

だって大切でしょう。そうして、百点を取ることができるとは、百点を取ったということだけです。

D、それは、百点を取ったということだけです。

私たちは、自分で得た知識を、世の中に活かして、生きてゆかなくてはならないのです。百点を取ったからといって、それはその時だけのことです。突然、テロにみまわれて、愛する人が死んでしまったら、どんな気持ちだろう。その国の大統領は、どんな演説をして、国民を励ますのか。そして、今の自分に何ができるのか。そういうことを考えられるようになることが、本当の学力^②なのです。

おトイレに、花を活けたとしても、ほとんどの人は、見向きもしません。また、花を活けた人のことなんて思いません。しかし、そういう人の努力があって、この場所が美しくなり、心の安らぎが得られるのです。人の見えないところで、人がどれだけまごころを尽くしているかで、その社会や、その国の良し悪し^あというものは、決まるのだと思います。

上野誠『入門 万葉集』より

問一 A 〰 D に適する語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ すると エ さて オ そして カ なぜなら

問二 I に適する語を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 地味なところ イ みんなが知っているところ ウ 目に見えるところ エ あとから気づくところ

問三 〰部 a 「そっけない」・ b 「安らぎ」の意味をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「そっけない」		b 「安らぎ」	
ア	冷たく簡単であるさま	ア	相手への感謝
イ	細く弱々しいさま	イ	気持ちの落ちつき
ウ	きりっとせずしまりがなさ	ウ	汚れのない美しさ
エ	無邪気でかわいらしいさま	エ	心の揺れ動き

問四 〰部①「自分の愚かさ」とありますが、筆者の愚かさとはどのようなことですか。説明しなさい。

問五 〰部②「本当の学力」とありますが、筆者の言う「本当の学力」とはどのような力のことですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 最初はわからなくても、テストに出るところをしっかりと覚え、最終的にはテストで百点をとる力。
イ 社会で起きるさまざまな問題に対して、自分一人で考えるのではなく、常に周囲の人々と共有する力。
ウ 教科書の内容を丸暗記するのではなく、得た知識を活かし、その時々自分にできることを考える力。
エ 学校でただ授業を受けるだけでなく、自宅でも試験に向けて自主的に学び、知識を身につける力。

問六 筆者の考える「まごころ」とはどのようなことですか。「〰こと」に続くように、本文中から十五字で抜き出ささい。

三 次の（ ）内の意味に合うように、□に漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

- 1 無我□□（我を忘れて熱中すること。）
- 2 □□自得（自分の行いの報いを受けること。）
- 3 前代□□（今まで聞いたことがなくめずらしいこと。）
- 4 花鳥□□（自然の美しい風物。）
- 5 千差□□（様々なちがひがあること。）

四 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 キチョウな体験をする。
- 2 ゆっくりとコキユウを整える。
- 3 クラスメイトとトウロンをする。
- 4 コセイ豊かな作品がそろろう。
- 5 ドウトク of 教科書を読む。

